

これからの幼児教育

河野 重男

昨年十一月に、中央教育審議会教育内容等小委員会の「審議経過報告」が発表されました。これは、時代の変化に対応する教育内容のあり方について検討したもので、いわば二十世紀への教育のあり方を探求したものです。

二十一世紀へのわが国の社会的变化を的確に予測することは困難なことです。が、いずれにしても「不確実性の時代」ともいわれるほどに、これまで直面したことのない新たな変化や課題に取り組まなければならない社会であることだけは確かでしょう。そうした社会で要請されるのは、端的に言うて、主体的に変化に対応できる個性的な人間の育成だということになります。

この観点に立って、「報告」では、これからの学校教育のあり方、したがって教育内容のあり方を考えていくうえで、

特に重視しなければならない視点として、「自己教育力の育成」ということを強調しています。このことは、幼児教育としての幼稚園教育のあり方を問い直すうえで、じな視点だと思えます。

「報告」では、自己教育力を「主体的に学ぶ意志・態度・能力」としてとらえ、「学習への意欲と意志」「学習の仕方の習得」「生き方の探求」を内包する視点として強調しています。さらに、この自己教育力ということに関連して、「報告」のなかで、基本的生活習慣の形成ということが強調されていることに注目したいものです。

基本的生活習慣ということとは、とかく「きまりを守る」とか「箸が使える」というように狭くとらえられがちですが、もっと広義に学習の態度ともいうべきものを含んでいる

ことがだいじだと思えます。つまり、何事にも積極的な関心と好奇心をもってそれを学習しようとする旺盛な意欲と、それを最後まで追求してやってやり遂げようとする強固な気力とをもつことを基本的な生活習慣としてだいに考えようというわけです。

このことは、最近の子どもについてよく言われる「無関心」「無気力」「無責任」の傾向の増大と表裏の關係にあります。こうした傾向が見られることは、さまざまな調査によっても確かめられていることですし、二十一世紀に生きる子どもという視点からは、このことは、まさしく大問題だと言わなければなりません。

旺盛な意欲と気力と責任性とを基本的な生活習慣として身につけさせることは、幼児期から小・中・高等学校の段階を一貫して配慮されなければならないことですが、とりわけ、幼児期と小学校低学年段階がこの課題達成にとって決定的にだいいじな時期だと言えます。幼稚園や最近の小学校における体験的学習の重要性の強調、家庭教育面での手伝いやテレビ視聴の問題、さらには地域社会における遊びの回復の問題なども、こうした視点から見直したいものです。

。 。 。 。

ここで、倉橋惣三先生の次のような主張に注目したいと思います。先生は幼児教育の目標という点について「神経が健全で、強健な子供をつくる。困難に打ち勝って疲れず、所信と使命を実行して行き得る人間、これこそ現代が要求している人間だ、と言いついておられます。そのために、方法として次のようなことを強調されました。

自然に子どもを触れさせる、戸外保育を重視する、このことが困難に打ち勝って疲れずということにつながる。また、子どもを机から解放し、小さな手仕事から大筋肉を使つていく方向へ方法を変えていく。さらに、神経質に生活を細切れにし時間を分割することを避けて幼稚園生活のスケールを大きくしていく。そして、結局は、「自由感を大事にしなげら、同時にそれを並んで仕事において精神感を持たせる」等々。

「自由と精進」。まさしく未来を洞察された倉橋先生の現代の幼稚園教育に生きる名言なのではないでしょうか。

(お茶の水女子大学)